

後方腕組みおじさんに、  
俺はなる。

hasuka

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

イースⅧの真エンドをクリアして、衝動のあまり出来上がったもの。  
ダーナに幸せになってもらうために、オリ主をぶっこんだお話。

# 目次

オリ主  
ダーナ

18 1



# オリ主

所謂転生というやつでイースⅧに描かれる舞台の一つ。エタニア王国が栄えた時代に生まれた俺。

ここがどんな世界なのかわかった時は時は絶望しました。

だって、この時代で人は滅ぶんだもん。そんな感じで死んだ目をしながら過ごすこと数年。

近所の子供たちと遊び始めたころ俺はその少女に出会う。

陽の光にきらめく青色の髪、透き通った水色の瞳、可愛らしさと精悍さが同居した顔立ち。

見間違えるはずもない。幾度となく繰り返し見てきた物語、彼女の生きざまに胸を打たれ、涙を流した。彼女を何とか救う方法はないのか。あの物語をみた人なら考えたことがあるはずだ。

イースⅧにおける主人公アドル・クリステインと並ぶもう一人の主演。

その少女の名前は、ダーナ。

その日は呆然と過ごして両親に心配されてしまった。

こんなご都合主義なことがある？狙ったかのように物語の主役と同じ時代、同じ場所に生まれるなんて。そして考える。彼女がいるとわかった、それで俺はどうしたいんだ？

彼女に訪れる未来を変えたい。自然とその思いが湧き上がる。

心に小さな、けれども確かな灯がともる。

“ラクリモサ”と呼ばれるものがある。イースVIIIにおける最大のネタばれ要素。

涙の日とも呼ばれるそれは生命の選択と淘汰を行う現象で、種に進化を促すためにはじまりの大樹によってもたらされるもの。選択と淘汰のサイクルによって世界のバランスが保たれる。

はじまりの大樹に選ばれなかった種は例外なく滅びる。選ばれた種は加護を得る。

抗う術は存在しない。そんな理不尽極まりない現象だ。

さらにたちの悪い事が二点ある。

一点目。その滅ぶ種の中で“最も強い輝きを放つ魂”持ち主一人だけが“進化の守り人”として選ばれ、不老不死の存在となり未来永劫繰り返されるラクリモサを見届け

なければならぬ。

二点目。ラクリモサをもたらすはじまりの大樹を作ったのが大地神マイア。

そしてこの世界で起こるすべてのことが大地神マイアの見ている夢だということ。

ラクリモサを止めた場合大地神マイアが眠りから覚めるため、何が起こるか。

この世界全てが寝ているときに寝ている夢↓起きる↓世界が滅ぶ。

種が滅びないようにラクリモサを阻止すると世界が滅びます。

とんだ罫である。まさに、どうあがいても絶望なのである。

イースⅧにおいてダーナはラクリモサによる人の滅びを阻止することに成功するが、結果、大地神マイアによって眷属、ラクリモサを司る女神にされてしまい、自身がラク

リモサを起こす立場になってしまうという個人的にかなり救いのない終わりになっている。

あのエンディングは俺に凄まじい虚無感をもたらした。

ダーナ、オルガ、サライの尊い友情をもっと見ていたかった。

ダーナとラステル、初々しい二人をもっと見ていたかった。

ダーナとアドル、あの二人の尊い関係をもっと見ていたかった。

俺には知識がある。誰も知らない物語を知っている。

そして、この世界の無茶苦茶っぷりも知っている。

ならば、ダーナに訪れるあの結末を変えることのできる可能性はある。

その方法は、俺がダーナの代わりに眷属なり、世界を見守る存在になること。

名付けて「後方腕組みおじさん」化計画。

見ている大地神マイア。この世界を精一杯生き抜いてやる。笑って生きてやる。

推しのために、好きな人のために命を懸けられるオタクの底力を見せてやる。

覚悟を決めてから驚くほど心が軽くなった。

悔いのないように生きようと、ダーナや他の子どもたちとも積極的に関わった。

視たなくても視えてしまう予知に塞ぎ込んでいるダーナを見かねて、他の子供たちとダーナ家に突撃。一緒に遊びまわった。優しい彼女はすぐに皆の人気者になり徐々にだがダーナに笑顔も増えてきた。そうそう、やっぱり笑顔でないとね（隙あらば後方腕組みおじさん）

ちなみに鬼ごっこやかくれんぼ、外での遊びは彼女の無双状態でした。

逃げる場所、隠れる場所を予知してくるのはホントにチートだわ。身体能力も高すぎい。



それで申し訳なきさそうにして謝ってくる彼女に笑いながら、次は勝つ！と挑み続けて結果惨敗。

皆で笑いながら遊び倒した。

ダーナの幼少期、彼女の精神性を決定づけてしまう出来事がある。火事で母親を失ってしまふのだ。母親から予知能力を封じる指輪をもらいそれによって普通の生活を送るようになったダーナ。

しかし母を失ったことでこう思う。私が予知していればお母さんは助けられたんじゃないかと。

そして、予知によって救えるのなら手の届く範囲でも助けようと。それから彼女は超人的な精神力でその道を進み始める。

この世界でもダーナはその指輪をはめている。皆で遊び始めて数年後、彼女はその指輪をはめた。

お母さんからもらったのと嬉しそうに話し、以前よりも活発になつて笑顔も増えた。

……守護らねば、この笑顔（隙あらば後方腕組みおじさん）

鬱なんて誰得なので、ダーナ母は死にません。死なせません。

なので、燃え盛る家にダイナミックエントリー!!

ダーナ母発見!! 確保!!

脱出!!

ね、簡単でしょ?

ダーナ母は火傷こそ負いましたが命に別状はないとの事。

いやー良かった良かった。本当に、鬱なんて誰得だからね。助けられてよかった。

俺は両手両足に大火傷を負いましたが生きてるので問題なし。

理力とかいう不思議な力がある世界だからね。その使い手さんにダーナ母と共に治療してもらった。

両親には酷く心配され、こっぴどく叱られ、最後によくやったと言われた。まあ、これはわかるよ?

けどダーナ、なんで君がそんなに泣くの?

ごめんなさい。私が指輪をつけていなければ予知で防げたかもしれないのに。だつて?

違うよ。ありがとう。それだけでいいんだ。俺もダーナ母も生きてる、それで十分じゃないか。

伝えると驚いた顔をして、そして、ありがとう。と笑って言ってくれた。

うんうん、やつぱり笑顔が一番だ。

この世界でもダーナは、私の力で救える人がいるなら助けたいと大樹の寺院に迎えの人たちと旅だった。俺もそれに合わせて世界を回る旅に出る。ラクリモサを阻止するには戦闘力も必要になるからだ。

両親は心配しながらも笑顔で送りだしてくれた。いつでも帰ってこいと。幼い頃は世界に絶望し無気力だった。覚悟を決めてからも心配をかけた。

それでも愛情をもって見守ってくれた。涙が零れそうになるがこらえ、笑って旅立つ。

それからは東西南北どこにでも行つた。平和な国にも、争っている国にも。全力で旅をした。何度も死にかけてし、何度も理不尽な出来事があつた。

けれども折れることはなかつた。もつと理不尽ことを知っているから。

各地の人たちと一緒に笑つて、ご飯を食べて、戦いもあり、そして失つたり。

精霊たちにも出会つた。様々な理法具も集まつた。そうやって様々な縁を繋ぎながら、俺は自らを高め続けた。

王都や寺院にも何度か足を運んだ。栄華を極めていただけあって、凄まじい都市だった。

訪れるたびに寺院を抜け出したダーナがいて、お互いの出来事を話した。

そんなに頻繁に抜け出しているのか聞いたことがある。すると俺が王都や寺院に来るのが“視えた”そう。だから会いに来たんだ。とニコニコしながらそう言われた。死ぬかと思いました。恥ずかしいからそういうことを言うのはやめなさいと伝えてもクスクスと可愛らしく笑うばかり。俺を殺す気かな？

オルガや、サライともこの頃に知り合った。お転婆姫のこんな姿は初めて見るとそう言つて驚いていた。

そのような出来事を挟みながら、各地を旅すること数年。遂にダーナが大樹の巫女となつたようだ。俺はその話を旅先で耳にする。

お祝いには行つておこうと寺院に立ち寄りプレゼントを渡す。

幸い、ダーナは喜んでくれた。そして、これまでのようにお互いの出来事を話す。

すると彼女は俺が今いるんな所で“聖者の再来”と言われてることを教えてくれた。違うよ。

俺は聖者なんかじゃない。ただ、好きな女の子の未来を変えたいと必死に、がむしゃらに生きていただけなんだ。そんなに嬉しそうに、幸せそうに話さないでほしい。

君達と同じ時代を一緒に歩いていきたいと、そう思ってしまうから。

「私やオルガちゃん、サライちゃんに君。皆がいればどんな事でも乗り越えられるよ。」

そう言った彼女の顔を俺は見る事ができなかった。見たら覚悟が消えてしまうかわかったから。

とても穏やかな時間。はじまりの大樹は憎らしいほど悠然と俺たちの前にあった。

ダーナが大樹の巫女になってから暫く、竜種の様子がおかしい、そんな話が出始めた。いよいよだ。近々、王都に流星が落ちてくる。俺はその混乱に乗じて寺院に忍び込む。

とある場所に繋がるのがはじまりの大樹の根本。しかし、はじまりの大樹の根本には大樹の巫女しか立ち入ることができない。この決まりのせいでギリギリまで動くことができなかった。

機会は一度きり。やってやる。

ラクリモサを阻止するための第一関門。王家の谷へと入りセレンの園へ行く。

詳細は省くが、ここに存在する想念の木がラクリモサを止める力の一つだ。

王家の者しか入れないし知らない場所だが、俺は知っている。

なので、転移で余裕でした。何度も作中で目にしたんだ。忘れるわけがない。

すると現れる進化の守り人たち。

何者か、だって？

どうも、好きな女の子の未来を変えたいだけの男です。だから手を貸して。

無駄？ 滅びはさけられない？ 世界のために必要なこと？

ハア。ならなんでこんなものが残ってるんですかねえ。未練たらたらなのが丸わか

りなんだよなあ。

あなたたちの誰かが守り人になった時点で破壊すれば良かったじゃん。

ん、怒った？ 怒ってない？ ごめんね、俺も熱くなった。

とりあえず、挑戦させてよ。失敗したら馬鹿にしていいから。

俺にとって、世界よりダーナが大切なんだ。

え、協力してくれる？ ありがとう！ 恩に着るよ。

大丈夫、やり方は“知って”いるから。

実は俺のことは見ていた？ 野郎を見ていたって面白くもなんともなかっただろうに。

まあ、暇つぶしになったのなら頑張ってきたかいがあったよ。

その時が来たら、呼ぶよ。

……なに？ ウーラ。いやサライさん。ダーナは悲しむぞ、って？

わかっているよ。彼女が慕ってくれていることぐらい。悲しませてしまうだろうね。

だけど俺は、ダーナに生きていてほしいんだよ。世界のためじゃなく、自分自身のための人生を歩んでほしいんだ。彼女を守り人に、進化の女神になんかさせてたまるか。

“ 視えて ” いるのかだって？ 俺は、 “ 知って ” いるんだよ。

第一関門は突破かな、彼らの協力なくしてラクリモサを止めることはできない。

彼らは、はじまりの大樹から繋がっている “ 見届けの丘 ” と呼ばれる場所への道を開いてくれる。

おおよそ、その場所がラクリモサの中心部と言っている。

なのでその場所に行けなければどうしようもないのだ。彼らが協力してくれて、良かった。

あの日以来、ダーナには会っていない。

これでいい。未練は、無い。

王都の空に理力の障壁が張られる。そして、星が落ちてくる。ラクリモサの始まりだ。

走り出す。無事に大樹の根本まで来ることができた。

守り人の皆さん、お願いします。目の前に現れる転移陣。いざ出陣!!

やっぱり“知って”いるっていうのはチートだわ。

これまで培ってきた力と経験を以って見届けの丘に存在するそれぞれの“道”を突破。

囚われていた想念を開放する。解放された想念によってセレンの園にある想念の木がラクリモサを阻止できる程の力を宿す。一度セレンの園へと転移し、作中のアドルと同じくその力を武器に宿す。これで最後の準備は整った。

眼前には作中のラスボスである《テオス・デ・エンドログラム》。

感慨深いな。今まで本当に長かった、ような気もするし。あつという間だった気もす



る。

とにかく無我夢中で生きてきた。行くぞ、最後の戦いだ。

後ろから聞こえる俺を呼ぶ声。

まさかと思い振り返れば、此方に走ってくるダーナとオルガさん。

ちよつと待って、なんでなんで二人がここにいるの!!!

「君一人に背負わせたりしない。それに言ったよね、私たちならどんな事でも乗り越えられるって。」

「同感だ。しかしまったく、お転婆が二人もいると気が休まる暇もない。」

うわあああ!!!!こうならないように今まで頑張ってきたのに!!いや、まだだ、まだ終わらんよ!!ここを乗り切れれば俺の願いは叶うんだから!

顛末を語ろう。俺は眷属化による《後方腕組みおじさん》に……なれませんでした!!  
ならば、ダーナが原作どうりになったかといわれるとそうでもない。

理力と想念、相反する力をもって世界を救ったダーナ。原作において彼女一人によって行われたそれ。

しかしこの世界ではダーナ、オルガさん、俺の三人で行った結果、負担が分散された  
ようで三人とも人としての存在を失うことなく生存できたようだ。

教えてくれたのは大地神マイア。戦いが終わって滅びを止められたか止められな  
かったのか分からず呆然とする俺たちの前に、彼女は現れた。

彼女によるとこの世界は元の世界からは分かれた世界になったそうだ。

彼女の手には原作にはなかった本のような物があった。

今後はそれに俺たちの世界が紡がれていくと。

ラクリモサはどうなる、またいずれ起こるのかと尋ねる。

曰く、もうこの世界にはラクリモサを司るものはなく、はじまりの大樹も力を失った。  
さらに彼女の力も干渉できないため起こることは無い、と言われた。

ラクリモサが起こらないため、この世界が、彼女にとつては物語が《続く》のも《終  
わる》のもこの世界の種に委ねられました、とも。

「あなたたちがこれから、どのような物語を紡いでいくのか楽しみです。」  
そう言つて、大地神マイアは姿を消した。

守り人たちも役目から解放された。

不老不死からも解放されたようで、この世界で生きていく為にまずは見た目を変えなければなりませんね。それにしても本当に成し遂げるとは。とヒドウラ。

突き抜けた馬鹿を見るのは楽しいもんだ。今度、一緒に竜種でも狩りに行くぞ。とミノス。

「主の生き方は不合理で不器用であつたが、なかなか面白いものであつたわ。とネス  
トール。

ウーラことサライさんは、ダーナにオルガさん、二人に抱きしめられていた。

三人とも涙を流しながら、けれど笑つて喜びあつている。

やりきつたという実感があふれてくる。この光景を見るために生きてきた。

うんうん、やつぱり彼女たちは笑顔が一番。これからもつと友情を深めていくんや

で（隙あらばry）

眷属化による後方腕組みおじさんにはなれなかったが、故郷に帰って皆の風の噂を聞きながら頷く後方腕組みおじさんにはなれるじゃん、と気づく。

そうと決まればお邪魔虫は退散しようと思おうとしたら、ダーナ達に囲まれる。

どこに行くの、つて？ いや、もう俺のやることは無いから故郷に帰って静かに暮らそうかなって。

うーん、それは認められないかな、いやダーナさん。なんでそんなにニコニコしながらそんなこと言うんです？ それにがちりと腕をつかまなくても。

失礼ですがあなたのセレンの園での言葉、ダーナさんにお伝えしましたの。

サライさん、あんたって人はあ！うわあああ!!!死ぬ！恥ずかしくて死ぬ！

今、王都では混乱が生じているはずだ。それを最小限に抑えるためにはダーナにサライ、そして“聖者の再来”と呼ばれるあなたが必要だ。

オルガさん、その二つ名止めて！俺は普通に旅をしていただけなの！

混乱する俺の腕が引つ張られる。目の前にダーナの顔、そして、唇に柔らかな感触。

「私もね、君のことが好き。」

「私はね、ずっと君に助けられてきたんだ。

幼い頃、予知の力を嫌っていた私に向き合うきっかけをくれたのは君だよ？  
お母さんを助けてくれたのも、巫女になるための修行中励ましてくれたのも、  
大樹の巫女になった後も世界にはたくさんの未知があるって教えてくれたのも  
ほら、ちよつと思ひ出すだけでもこんなにある。」

「だからね、今度は私が返す番だよ。」

顔を赤くしながら、それでももしかつりで見つめてくる彼女。

好きな女の子にここまで言われて、返さないなんて男じゃないよなあ。

今度は俺が彼女を引き寄せ、抱きしめる。

「俺も、ダーナが好きだ。」

「君の優しさが、その在り方が、俺に生きる希望と勇気をくれた。

逆だよ。助けられたのは俺だ。」

「これからも、君と共に生きていきたい。」

抱きしめ返してくるダーナ。あー、こんな幸せなことがあつていいのだろうか。  
なら、この幸せが続くようこれからも全力で、笑つて生きていこう。

## ダーナ

「俺も、ダーナが好きだ。」

「君の優しさが、その在り方が、俺に生きる希望と勇気をくれた。

逆だよ。助けられたのは俺だ。」

「これからも、君と共に生きていきたい。」

私を抱きしめる君。ああ、幸せだなあ。そんなことを思いながら抱きしめ返す。

君は一体、どれだけ私を幸せにすれば気が済むんだろう。幸せ過ぎて逆に不安になっちゃうよ。

だからこの幸せがずっと続くように、笑って君と生きていこう。大丈夫、君と二人ならどんなことでも乗り越えていけるよ。皆で世界の滅びを防いだように。

「ふふ、懐かしい夢を見たなあ。」

二つの満月の光が窓から差し込む静かな夜。あの時の夢を見て目が覚めてしまったようだ。

寝台からゆつくりと体を起こす。隣で眠る彼を起こさないように。今日は二人とも世界各地を回る

旅から帰ってきたばかりだ。疲れもあつていつもより早く眠りに就いたがはつきりと目が冴えてしまった。寝台から降りて、窓辺に行き腰かける。そうして月を眺めているとあの頃の事を思い出す。長かったようで短かったような。穏やかでいて、けれども激しかった。

私も彼も必死で駆け抜けたあの時を。

私が大樹の巫女となる以前、幼い頃から私にはとある力があつた。それは“予知”の力。今でこそ視えた予知の“色”によつてどれくらいの精度なのか分かるけど、小さかつた私にはそんなことなんて分からなかつた。視えたとおりになつてしまう現実。

それに折り合いをつけることができず家に閉じこもる日々を過ごしていた。

君と初めて会った日も、そうして閉じこもっていた日だった。

部屋で過ごしていた私を両親が呼んだ。私にお客さんだよって。家に閉じこもっていた私に知り合いなんているはずもなく不思議に思ったけど、両親の私を呼ぶ声がとても嬉しそうだったから行ってみることにした。

はつきりと覚えてるよ、あの時の事。

夜を溶かしたような黒色の髪、どこまでも吸い込まれそうな漆黒の瞳、穏やかさの中に凛々しさを見せる顔立ち。

とても優しい笑顔を見せて、君は私の前に現れた。

君は挨拶をして自分の名前を言った後私の名前を聞いた。

ちよつと緊張しながら名前を告げる。

「ダーナ。ダーナ・イクルシア。」

「じゃあダーナ、俺たちと一緒に遊ぼう。」

彼の後ろには近所の子供たちがいて私に手を振ってくれていた。

突然の誘いに戸惑った、私はこれまで誰かと遊んだことなんてなかったからだ。



どうしていいのかわからない私の肩にお母さんがそつと手を置いた。

「ダーナ、行つてらしゃい。大丈夫よ。皆いい子たちだから。」

母親同士の集まりなんかで他の子どもたちのことも知っていたお母さんはそう言った。

閉じこもっていた私を心配してくれていた両親にとつてこの出来事が元気になつてくれるきっかけになればいいと思つていたんだろう。

「じゃあ、うちの子もよろしくね。」

お母さんの言葉に頷いた君は、私にそつと手を差し出した。

「行こうダーナ。皆が待つてる。」

「う、うん。」

おずおずと私はその手を握つた。私より少し大きな手はとても暖かかった。

そうして君は私を家の中からお日様の下へと連れ出してくれたんだ。

その日からは毎日のようにみんなと遊んだ。家の手伝いをする以外はみんなと会つていた気がする。とても、とても楽しかった。君はいろんな遊びを知つていて、みんなはとても優しくて。

君が腕を組んで私たちを見ながらなんだかしみじみと頷いているのを見たことがあつた。その仕草があんまりにも似合つてなくて面白くて、他の子と一緒に笑つたんだ。

「ぜんぜん、にあつてないよ！」

すると君はニヤリと笑つて

「わかつた。なら、おかわりだ！」

そう言つて同じことをする君。皆でお腹を抱えて大笑いした。今まで涙は悲しいときに出るものだつて思つていた。“予知”のせいで泣くこともあつた私に初めて笑つても涙が出るんだつて教えてくれた。

遊んでいるときは“予知”のことを忘れていられた。お母さんもお父さんも、今日はこんな事があつたのと話す私を優しく見てくれた。

「よかつたわね、ダーナ。」

「うんー」

君と出会つて、みんなと遊び始めて以前のように塞ぎ込むことがとても少なくなつた私。そんな私の変化を両親はとても喜んでいた。そんなある日のこと、遊びに行こうとする私をお母さんが呼んだ。

「今日はダーナにプレゼントがあるの。」

お母さんがくれたのは指輪だつた。理力を封じることのできる指輪。これを着ければ予知を見ることがなくなる。それを聞いてとても喜んだ。これでみんなと一緒にになれる、もう悲しいことを見なくても済むんだつて。指輪の力は本場で、私は“予知

“を視ることがなくなった。そしてこれまでに以上に活発になった。そんな私を見て君が

「ダーナはお転婆姫だな。」

なんて言うから、私もむきになっちゃって言ったよね。

「君は腕組みおじさんだね。」

お互いに嘖き出して笑いあつた。そんな幸せな日々。

そこまで思い返して私は目を眺めるのを止め、寝ている彼に近づく。

仰向けに寝ている彼の顔をのぞき込む。あの頃よりもずっと穏やかさと凛々しさを増した顔。私は手を伸ばしてその顔をそつと撫でる。そこに刻まれた傷。“火傷”の痕を。彼は疲れからか目が覚める様子もない。今思い出していたのは私と彼の“はじまりの記憶”。そして、彼のこの火傷の痕は私の、《ダーナ・イクルシア》の“原点”だ。今でも思う時がある。あの時、あの結果になつていなかったら私はどうなつていたんだろうって。それほどに私の人生を変える切っ掛けになつた出来事。

お父さんと二人でお出かけをした日のことだった。私は“予知”を見ることがなくなり何の憂いもなく日々を過ごしていて、こんな日がずっと続くんだって思っていた頃。用事を済ませて帰る途中、家のある方から大きな煙が上がっているのが見えた。二人で大急ぎで帰り着くと、現れたのは燃え盛る私の家だった。そして聞く、お母さんが家の中に取り残されていることを。

「お母さん!!お母さん!!!」

泣きながら家に近づく私を泣きながら止めるお父さん。周りにいる誰もが動くことが出来ずに、ただ燃える家を見続けるしかない、そんな時だった。

「おい！誰かあいつを止める!!」

その声に振り返ると目に入ったのは、口元を手拭いで覆って全身ずぶ濡れになりこちらへと走ってくる君だった。

誰も止められず私たちの横を走り抜けた君はそのまま燃え盛る私の家に突入した。

「嫌!!嫌ああああああ!!!」

そんな!!彼まで失ってしまうの!!私に居場所と笑顔をくれた彼さえも!!!

間違ひなく、あの時の私は絶望していた。私の、私の所為だ。私が“予知”していれば防げたかもしれないのに。そんな思いに囚われていた。

永遠とも思える時間。誰もが二人とも助からないと思つていた時、君がお母さんを背負つて家の中から飛び出してきた。お父さんと一緒に二人の名前を叫びながら駆け寄る。お母さんは火傷を負い意識を失つていて、君は意識はあつたけど両手両足に大火傷を、顔も少し焼けていた。

「おい!!誰か医者と理術士を呼んで来い!!」

誰かのその声と共に二人を助ける為に動き出す周りの人たち。

「見たか世界。結果なんていくらでも変えられる。」

地面に倒れこんで息も絶え絶えだった君は、そう言つて意識を失つた。その後、駆け付けた医者と理術士に二人は手当をされた。幸いに、お母さんも君も命に別状はなかった。

「無意識に理力を使つたんだろう。でなければ命を落としている。」

手当をしてくれた人が言つた言葉にゾツとした。そしてますます後悔の念が強くなる。私が予知を封じていたせいだ。視えていればお母さんも君も危険に晒さずに済んだかもしれないのに。

二人が無事だった喜びと自身への後悔で私は泣き続けた。お父さんはそんな私を

ずつと抱きしめてくれて、泣き疲れた私はそのまま眠ってしまった。

次の日、お父さんと君の両親と二人のお見舞いに行った。お母さんと君は目を覚ましていて、私たちに気づいた二人は笑顔を見せてくれた。

それを目にしたとたん涙が溢れてきた。駆け出してお母さんの胸に飛び込む。

「お母さん!!」

「ごめんね、ダーナ。心配かけたわね。」

お父さんが私ごとお母さんを抱きしめる。この暖かさが消えないように私も強く抱きしめた。そうして暫く、今度は君を見ると君の両親に抱きしめられながら叱られ、褒められている姿が目に入った。君が私を見る。謝らなきや、そう思った。

私は近づいて口を開いた。「予知」の力があること、指輪でその力を封じていたこと、指輪を外していれば火事のこと、視えて「防げていたかもしれないこと。」

また涙が零れてきた。

「だから、ごめんなさい!」

俯いていると君の手が伸びてきて私の額を軽く弾いた。驚いて顔を上げると君は優しく微笑んでいて

「ダーナ、君の所為じゃない。君のお母さんも、俺も死ななかつた。今はそれでいいじゃないか。それにこういう時はありがとう、それだけでいいんだ。」

そう言つて火傷の痕が残る手で私の涙を拭つてくれた。心が熱を持った。暖かくて、なのに苦しい。それまで輪郭のなかった君への想いがはつきりと形になつた瞬間。当時はその感情が何と呼ばれるものか知らないまま、私は突き動かされるように君のその手をぎゅつと握つて、今できる精一杯の笑顔で

「ありがとう！」

そう言えたんだ。そして思う。君のように誰かを笑顔に、助けられる人になりたい。で。これが私の“原点”。一生忘れることのない大切な出来事。

あの時抱いた感情が恋だつて知つたのは大樹の寺院に行つてから。オルガちゃんやサライちゃんには沢山からかわれたなあ。

少しの気恥ずかしさを感じていると、そつと手が重ねられる。

「ごめんね。起こしちゃった。」

「どうした、眠れなかつたのか？」

「ううん。あの頃の夢を見て目が覚めちゃったの。」

「そうか、実は俺もあの頃の夢を見てた。」

「あはは、お揃いだね。」

寝台に座ると彼も体を起こし私の隣に座った。彼の右腕を抱いて肩に頭を預ける。久しぶりにあの時を思い出したせいなのかいつもより心臓の鼓動が早い。

それを誤魔化すように私は口を開く。君のようになりたいと思つたこと。おかげで“予知”と向き合えるようになったこと。そして、大樹の寺院から使者が来たこと。

「あの頃の私は“大樹の巫女”になろうとも、なれるとも思つてなかつた。だから修行が終わつたら故郷に帰って君に恩返しをしようと思つてたのに、君は『旅に出ることにしたんだ』って、びっくりしたよ。」

「だから悪かつたって。でも今なら分かるだろ？あの旅が必要なことだつたって。それを言うなら俺が寺院に会いに行くよって約束したら、来るのが“視えた”から抜け出して王都でご飯を強請つたダーナも大概だよ。後でオルガさんとサライさんに見つかつて。大変だつたんだぞ。なのに君はクスクスを笑うばかりで、二人が理性的な人で助かつたよ。」

「ふふつ。『ようやく見つけたぞ！ダーナ！つと、その方は？』『彼？私の初めての人、かな？』『はじつつ！？貴様あ！！』『違う！！誤解だ！！』って、いつも君の所為で揶揄われてた



から意趣返ししようかなくて。初めて見たよ君のあんなに焦った顔。」

尽きることのない話。すると彼は立ち上がって柵の方へと向かう。戻ってきた彼の手にはお酒と二つの杯。

「完全に目が覚めた。明日は休めるし、今はダーナと話していたい。」

「うん。私ももつとお話したい。」

隣に座った彼から杯をもらいお酒を注いでもらう。自分の分も注いだ彼が杯をこちらに差し出す。私もそれに合わせる。

「乾杯」

寺院での修業は大変ではあったけれど挫けることはなかった。オルガちゃんやサライちゃんにも出会えた。二人に聞かれたことがある。どうしてそこまで誰かや何かの

ために動けるのかつて。私は話した。君との出会い、思い出、そして出発の前二人で話した時、君のようになりたいと言った私にくれた言葉。

「あの時の行動は反省はしているけど、後悔はしていないよ。」

「でもさ」

「救われた人は、救ってくれた人が死んだらさらに悲しむだろ？あの日、俺は悲しみを増やすところだった。だから死んだら駄目なんだ。」

「誰かを救うには、自分も生きていないといけない。」

「想いだけでも、力だけでも救えないんだ。難しいよね。」

「だからダーナ、生きるんだ。そして周りを頼るといい。君は優しいから誰かがきつと力を貸してくれる。」

「まあ、一度やらかした俺が言えたことじゃないけどね。」

誰かを助けられるのなら、君のように自分の身を犠牲にしても、そう思っていた私はハツとなった。そして、その言葉を胸に刻み付ける。だから私は頑張れるんだ。そう伝えると二人とも納得してくれた。そしてからかわれた、彼のことを話すお前は恋する乙女だったぞつて。顔が熱くなる。

「もう！オルガちゃん！」

「いつもお転婆姫に振り回されているのだ。これくらいは許してもらわねばな。」

「まあまあお二人とも。ですが良い方ですね。今は旅をしていらつしやるのでしょうか？ また会えるといいですわね。」

「それについては心配してはいないかな。王都や寺院には必ず来るって言っていたから。」

実はもう君が来るって“視えて”いたのは二人には内緒にした。初めて王都に来る君を驚かせてあげようって決めていたし、話したいことも沢山あったから。二人に話したら止められちゃう。君と王都を回って、見つけた秘密の場所にも行こう。楽しみだなあ。

久しぶりに再会した君はとても驚いて、あの頃と変わらない笑顔で再会を喜んでくれた。私と同じく背はあんまり伸びなかったみたいで私よりも頭一つ分くらいしか差がなかった。そして肩には見慣れない鳥が止まっていた。

「久しぶりだね。会いたかったよ。」

「ああ、久しぶり。元氣そうだよかった。」

二人で王都を見て回りながらお互いのことを話す。私は君の話に夢中になって、君は私の話を興味深く聞いていた。そうして話すこと暫く、私はずっと気になっていたことを聞いた。

「ねえ、その鳥はどうしたの？」

そしたら君は今まで見せたことのない苦い顔をした。予想していなかった反応に戸惑うと

「こいつの名前はリトル・パロ。旅先で出会ってから勝手についてくるようになったんだ。」

「オマエ、オモシロイ！オマエ、オモシロイ！」

「わ！喋った!?!」

どうやら人の言葉を理解し話すことの出来る鳥のようで、仕込めば色々話せるようになる。君は言った。

「そうだ、今度からパロに手紙を持たせてダーナに送るよ。でないと君は王都の外まで飛び出してきそうだ。」

「もー、ひどいなあ。流石に私でもそこまではしないよ。でも手紙がもらえるのは嬉しいかな。ちよつと待って、そうは言ってもパロは大丈夫なの？」

「大丈夫。旅先で似たようなことはしていたし、なにせパロは……いや、何でもない。出来るよな、パロ。」

「デキル！デキル！デモ、ホウビヨコセ！エサ、ヨコセ！」

「だそうだ。」

「あはは。じゃあ自己紹介しないと、私はダーナ。よろしくね、パロ！」

そしてオルガちゃんたちに見つかって、君を紹介して。君とオルガちゃんは初対面なのに

「苦勞、されていますね。」

「……分かってくれるか。」

それだけであつという間に仲良くなつちやうし、ちよつと嫉妬したんだよ。サライチちゃんはニコニコしながら私たちを見ていただけだったし。それから大樹の寺院も案内して、楽しい時間はあつという間に過ぎた。

君と過ごした時間はとても楽しかったけど、1つだけ気になることがあつた。私たちという時は笑顔を絶やさなかつた君が、どうして“はじまりの大樹”を見ていた時あんなに真剣な……違う。怒りや悲しみを堪える顔をしていたのか。その訳を聞くことができないまま君は旅を再開し、理由を知るのは“あの日”を迎えるまで待たなければいけなかつた。

暫くして、パロは本当に君からの手紙を運んできてくれた。手紙には様々な国や自然の美しさや厳しさが綴られていて、私はそれを何度も読み直した。故郷にも一度帰つていたみたいで両親からの手紙が入っていた時もあった。手紙の最後にはいつも私を気

遣う言葉が書かれていて、君に会いたいと思う気持ちは募るばかりだった。流石にその部分は見せなかつたけど、オルガちゃんもサライちゃんも君の手紙を楽しみにしていたんだよ？

私も君に手紙を書いた。寺院でのこと、王都でのこと。手紙の最後には君の旅の無事を祈る言葉を。

そんな日々を送り、寺院に来てどれくらいの時が過ぎただろう。

私は“大樹の巫女”に選ばれた。

私が巫女となって初めて君と再会した日。なんとか時間を作り君に会えた私。案内したのは前に行けなかつた私の秘密の場所。王都の入り組んだ所にあつて人も殆ど来ない、そしてそこからは王都の塔堂とはじまりの大樹がよく見えた。

風が木々を揺らす音と鳥のさえずり、水路を流れる水の音。まるでここだけ世界から切り離されたかのような穏やかな空間。

「おめでとう、ダーナ。」

「ありがとう。最近君の噂が王都や寺院に届く時があるよ、各地で人助けを行う旅人がいる。“聖者の再来”かもしれないって。巫女になってようやく君に近づけたか

なつて思つたのにまた遠くなつちやつた。」

「よしてくれ、俺はきつかけを作つただけで、彼らが勝手に救われただけさ。ドツボに嵌りそうだからこの話はここまでにして、今日はダーナに贈り物があるんだ。」

そう言つて君が渡してくれたのは、使い込まれた数冊の本と理力で加工された神秘的な氣配を放つ紺に近い紫色の草が三枚。本は君が旅した各地のことがまとめられていて、紫色の草は“アウラ草”といい靈藥の材料となるおとぎ話にしか出てこないとされるとても希少な草だった。

「本は読み物でも巫女の務めにでも役立ててもらえれば嬉しい。アウラ草は枯れないように加工してあるからお守りにでも、もちろん藥に使つてくれてもいい。三枚あるから二枚はオルガさんとサライさんに渡してくれ。」

「そんな！こんなに貴重なもの貰えないよ！」

「俺にはもう必要のないものだから。受け取つてもらわないと困るよ。」

半月刀をくれたサライちゃんと同じようなことを言う君。私はお礼を言つて大切にしました。そして置いてあつた椅子に二人で並んで座る。

隣に座る君の右手をそつと握る。子供の頃、私を外に連れ出してくれた暖かい手。とても穏やかなで幸せな時間。

「本音を言うと、ダーナが巫女に選ばれませんように、そう願つていた。」

「え？」

君の突然の言葉に戸惑う私。君を見ると君は前を向いたまま独り言のように続ける。「これから王都の民たちは君に期待をするだろう。サライさんにも。そして君たちは期待に応え続ける。分かるよ、ずっと君たちを見てきたんだ。だけど民たちは君たちが最善と思つて行つた行動でも裏切られたと思つたら手のひらを反す。そんな光景を俺は旅の中で目にしてきた。だから、選ばれてほしくなかった。」

「ダーナは優しいから、きつと多くの思いを託される。そんな君が背負う重さを少しでも肩代わりできればいいんだけどな。出来ない自分が情けないよ。」

ううん、そんなことない。君はずつと前から私を助け続けてくれてるんだよ？君がいるからありのままの私でいられる。君の想いが私に勇気と希望をくれた。だから、そんなに悲しい顔をしないで。私が好きになつたのは優しい笑顔を見せる君なんだから。

「そんなことない。」

「それに大丈夫だよ。君が教えてくれた、周りを頼れつて。だからね、私やオルガちゃん、サライちゃんに君。皆がいればどんな事でも乗り越えられるよ。」

どんな予知が見えても、どんな事が起こつても私たちなら絶対に乗り越えられるんだつて思つた。

君は何も言わず、握つた手を優しく握り返してくれた。このまま時間が止まつてほし



いと強く思った。

君はまた旅立ち、私は巫女として務めを果たす日々。君から送られた本は私たちの大きな助けになった。私の予知やサライちゃんの政では届かないところを支える力となり益々エタニアは栄えた。栄華と繁栄を極めていた時代の中、君は一人世界をめぐるこの時代に取り残されそうな人々を支え続けた。“聖者の再来”その声はますます大きくなった。

でも、あの日以来君には会えていなかった。そして私たちの知らないところで君は一人、運命との戦いを始めていた。

杯を重ね、思い出しながら話す。夜はさらに更けて私と君の話声だけが響く。

「あの頃は次から次にいろんな事が起きてあつという間だったね。」

「イオちゃんに出会って地下聖堂の存在を知り、精霊たちの力を借りてエタニアの、ううん、世界の真実を知った。君はイオちゃんにも会っていたんだね。言われたんだよ？」

『ダーナは幸せ者だねえ』って。」

「俺が、聖者の再来」と呼ばれてたから『どんな奴か見に来たんだ』と現れてね。全部話したら大笑いされた。『そこまで知っていて、世界よりダーナを選ぶなんて。でもそういうの嫌いじゃないよ、しつかりやりな!』そう言われたよ。」

「そして、星が落ちてくるのが予知で見えて対策が大変だって思ってたら、まるでそうなるのが分かっていたみたい、早く対策が終わったの。」

「君が各地でつないだ縁が王都に優秀な理術士を呼んで、そうして大陸中の理術士や君が王家に寄贈してくれた理法具で塔堂と各塔が強化できた。民の避難出来そうな場所も贈られた本に書かれていたし、他の国とのやり取りはパロが手伝ってくれた。」

この時に確信したんだ。君は滅びの事を知っていた。だからあの時、はじまりの大樹を見たときあんな顔をしたんだって。空になった杯を置いてジトツとした目で君を見る。

「何にも話さずに一人で全部背負っていたの、まだちよつと根に持つてるんだから。周りを頼れって言ったのは君だよ?」

すると君は困ったように笑って私を抱きしめた。

「本当にごめん。何を言っても言い訳になるけど、ダーナを守りたくて必死だったんだ。君が生きていれば俺はどうなったっていい、あの頃はそう思ってた。」

「じゃあ、今は？」

「君とずっと一緒にいたい。」

「ん。合格だよ。」

私も抱きしめ返す。私と君のお約束の行為。滅びを乗り越えて落ち着いたころ、改めて君にだけ視えていた世界の話を聞いた。君が生まれなかつた世界、それを知つてから時々怖くなる。君が突然私の前からいなくなつてしまふんじゃないかつて、だから少しい意地悪をしてこうして君がここに居ることを確かめる。

落ちてきた星を私たちは完全に防ぎ切つた。なのに私は胸騒ぎが止まらなかつた。君は大樹のもたらす滅びの事を知つていたと今の私は確信していた。なのにこの時になつても君は私たちの前に姿を現してない。まだ私たちの知らないことがあるんじゃないか、そんな思いが強くなる。

王宮にある空中庭園。そこで皆の歓声が上がる中、急に濃い霧が辺りを包み始めた。

「オルガちゃん！ サライちゃん！」

三人で固まり背中合わせになる。そして、私たち以外何も見えなくなつた。油断せず  
に周りを警戒しているとサライちゃんの様子がおかしいことに気づく。

「サライちゃん？」

「まさか、本当に……」

私たちの周りの霧が引き、少し見通しが良くなつた。そこに現れる三つの影。一体は水生生物を、もう一体は動物を、最後の一体は昆虫や植物を思わせる姿だつた。

私たちの前にオルガちゃんが出て叫ぶ。

「何者だ!!」

「私の名はヒドウラ。〃 進化の守り人〃 と呼ばれるものです。あなた方に危害を加えるつもりはありません。ただ、話しをするために来たのです。」

「突然現れて、その話を信じると？」

「ええ、彼らが話に来たというのは本当ですわ。」

その声に驚く。どうしてサライちゃんが？私もオルガちゃんも戸惑う中サライちゃんは彼らの隣へ行き私たちに向き合つた。そして彼らから話されるはじまりの大樹の真実。壁画と庭、ラクリモサのこと、守り人のこと。

イオちゃんとの会話と地下聖堂のモノリスからそれらを知っていた私とオルガちゃん。でもどうしてサライちゃんがその事を知っているのだろうか。私が尋ねる前に彼

女が言った。

「私も守り人なのです。」

「バカな!!」

オルガちゃんのかげ。でもサライちゃんは悲しそうに首を振り、話し始めた。彼女自身のこと、私を守り人として見出したこと。流石の私も動揺を隠せなかった。

私たちが落ち着くのを守り人たちは待つてくれた。ヒドウラさんが言う。

「今までの話を踏まえた上で本題です。ラクリモサはまだ終わってはいません。ですがあなた方と同じようにそれを止めようと戦っている者がいるのです。それもたった一人です。」

「まさか」

「あなたの予想どおり」彼です。彼はその身を犠牲にしてラクリモサを、いえ、世界の滅びを止めるつもりです。」

今度こそ私は取り乱した。どうして君がと詰め寄る私にサライちゃんは言う。

「私がダーナさんが守り人になるだろうと思つたように、他の守り人は彼が守り人になるだろうと彼を見ていました。でも彼は私たちの想像を超えていました。」

彼女が取り出したのは周りの風景ごとその時を記録する理法具。映し出される“セレンの園”。そして君と守り人たちとの邂逅。

『驚いたぜ！まさかこの場所にたどり着くとは。オメエ一体何者だ？』

『好きな女の子に訪れる胸糞悪い未来を変えたい。ただそれだけを願う男だよ。』

交わされる問答。初めて目にする君の激情。君だけに視えていた世界の滅びと大地神の見る夢、私に訪れる未来。そして、君の覚悟。

『あなたはそれでいいのですか？ダーナさんは悲しむわ。』

『わかっているよ。彼女が慕ってくれていることぐらい。悲しませてしまうだろうね。だけど俺はダーナに生きていてほしいんだよ。世界のためじゃなく、自分自身のための人生を歩んでほしいんだ。彼女を守り人に、進化の女神なんかにさせてたまるか!!』

君が守り人の前から姿を消したところで映像は終わった。私は子供の頃に戻ったように涙が止まらなかった。嬉しかった。君が私のことをそんなにも思ってくれていたことが、そして好きだと言ってくれたことが。悲しかった。私に何も言わずに一人で戦っていたことが。両手で顔を覆って泣く私。その両肩にオルガちゃんがそっと手をのせてくれた。

「サライよ、その映像を私たちに見せてどうするつもりなのだ。」

「今ならまだ彼に追いつけます。」

その言葉に顔を上げる。サライちゃんは申し訳なきような顔をした。

「試すようなことをしてごめんなさい。ですがダーナさんの覚悟が知れたかったの。」

行つても彼を救えないかもしれません。逆に彼の言つたとおりになるかもしれません。最悪、ラクリモサを止められないかもしれません。それでも抗う意思があるのか。」

心に大きな灯がともる。体の奥から尽きることなくあふれてくる君への想い。奮い立つ。

「どうやら、心配はいらなかつたようだな。サライ。」

「そのようですわね。オルガさん。」

「オルガちゃん、サライちゃん、力を貸して!!私も、彼も、皆も死なない未来をつかみ取るために!!」

「ああ!!」「はい!!」

すぐに追いつくから待つて。今度は私が君を支える番だよ。言つたよね、皆とならどんなことでも乗り越えられるつて。そして全部終わったら伝えよう、『君のことが好き』と。

「あの時ダーナにキスをされて俺はこのまま死ぬんじゃないかって思った。」

「大げさだなあ。だけど私も君に抱きしめられてこれは夢なんじゃないかって思った。」

「似たもの同士で、お互い様だな。」

「うん。そうだね。」

お互いを抱きしめながらの会話。あの日、世界の滅びを乗り越えることの出来た私たち。その後も、パロがマイア様の化身だったり、サライちゃん達が守り人から解放されたり、いろいろあつたけどお互いの無事を喜び合つた。私は何処かへ去ろうとする君を捕まえて想いを伝えた。君もそれに応えてくれて、生まれてきてよかったと心の底から思えた。

その後は皆で王都の混乱の終息に当たる日々。各地に縁がある君が王都の外交官達と世界を回り、私とオルガちゃんは寺院を率いて民に寄り添い、サライちゃんは民に積極的に姿を見せて王都の混乱を最小限に抑えた。

そうして世界が落ち着きを取り戻したころ、サライちゃんの手腕で上手く真実を公表したことで私と君の名は世界に広まった。そしてそれが私とサライちゃんの狙い。もちろん君と一緒にいるための。



私は最後の戦いで力を失ったことにして巫女の役目をオルガちゃんに押し付け……引き継いだ。

「まったく。あの時のお前たちの想いを知っているのだから、断れば私が悪者になってしまうのではないか。」

オルガちゃんはそう言つて引き受けてくれた。私は本当にいい人たちに巡り合えたと思う。

そして、私は君と結ばれた。あの時の幸せは一生忘れることはないだろう。それから一緒に世界を旅した。君が手紙で書いていた場所を巡り、故郷にも帰った。私の両親も君の両親もどちらも祝福してくれた。

旅をすること数年。今私たちは王都のはずれに家を建て暮らしている。時々王宮や寺院に相談役として招かれたり、フラツと旅に出たりするそんな毎日。

「私ね、今本当に幸せなんだ。」

「それは俺も同じだよ。ダーナと過ごす日々は毎日が宝物だ。」

体を離して君を見つめる。穏やかに微笑む君を見てあふれ出す暖かい気持ち。目が覚める前に見ていた君と想いを伝えあつた時の夢、あの時抱いた決意を君に伝える。

「この幸せがずっと続くように、一緒に笑つて生きていこうね。君と二人ならどんなことでも乗り越えていけるよ。」

「ああ、これからもよろしくな。」

私は目を閉じて君に顔を近づける。君の近づく気配。

そして、月明かりに伸びる私と彼の影は重なった。